

ますます広まって

使徒の働き 6章 1-7節

はじめに

今日の礼拝後は、信徒総会があります。この年末の信徒総会は、来年度の教会のあり方を決める信徒総会とも言えます。そこで今日は、信徒総会の前に、新約時代にできた最初の教会である「エルサレム教会」から教会のあり方を学びたいと思います。

エルサレム教会は最初、イエス様の弟子たちを中心とする120名ほどの祈り会から始まりました。そしてペンテコステの時に、ペテロの説教によって三千人の人が洗礼を受け、その後も順調に成長していき、男性だけでも五千人（使徒4：4）の教会になりました。男性だけでも五千人ですから、女性や子どもたちも含めれば一万人ぐらいの教会になっていたかもしれません。このようにエルサレム教会は、かなりの勢いで急成長していったのです。

しかし、そのような急成長しているエルサレム教会の中で、アナニヤとサッピラの問題が起こるのです。彼らは、人々を欺いて献金額をごまかしました。彼らは人々を欺いて、自分たちを敬虔なクリスチャンに見せようとしてしました。しかし、彼らは人々を欺けても、神様を欺くことはできませんでした。そこで彼らは、息が絶えて死んでしまったのです。

このことを通してエルサレム教会は、「神様を恐れる」ことを学びました。教会は、人の前ではなく、神様の御前に生きる者たちの共同体であることを学んだのです。

1. エルサレム教会におきた問題

今日の聖書箇所にも、エルサレム教会にまた一つの問題が起きたことが書かれています。それは、1節にはこうあります。「**そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。**」

エルサレム教会に起きた問題は、ギリシア語を使うユダヤ人のやもめが、毎日の配給でなおざりにされていたという問題です。エルサレム教会には、教会の中に二つのグループがあったようです。一つはヘブル語を使うユダヤ人で、もう一つはギリシア語を使うユダヤ人です。両方ともユダヤ人でしたけれども、言葉が違ったのです。

ギリシア語を使うユダヤ人というのは、外国で生まれ育ったユダヤ人です。彼らは外国で生まれ育ったので、当時の公用語であった「ギリシア語」を使ったのです。彼ら「ヘレニスト」と呼ばれていて、ユダヤ人のもとの言語であるヘブル語やアラム語をほとんど話せなかったようです。彼らの中には、夫を亡くしたやもめがいました。彼らは外国で暮らしていましたが、人生の最後はユダヤ人の聖地エルサレムで過ごしたいと願って、年老いてから

エルサレムに移り住んで来たのです。

ヘブル語を使うユダヤ人というのは、ヘブル語やアラム語を使うユダヤ人で、彼らは「ヘブル人」とも呼ばれていました。使徒たちも、ヘブル語を使うユダヤ人でした。

このようにエルサレム教会には、二つのグループがあったのです。私たちががみのキリスト教会も、教会の中に主に二つの言語があります。日本語と韓国語です。そのように二つの言語が入り交じって、一つの教会となっています。教会の中に言語や生まれ育った国が違う人たちが集まると、言葉の壁や文化や価値観の違いを経験することもあります。時には、それが原因で衝突が起こることもあります。

エルサレム教会も同じような経験をしたのです。エルサレム教会も、言葉や文化や価値観の違いによって問題が起こったのです。しかしエルサレム教会は、その問題を適切に解決し、さらに成長する教会となっていったのです。7 節を見ると、「**こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った**」とあります。教会は、必ず小さな問題から大きな問題まで起きてきます。それは、救われてもなお罪を持つ人間の共同体ですから避けられません。神様は、起きた問題を通して私たちを訓練し、さらに成長する教会へと整えていかれるのです。

2. エルサレム教会における愛の業

エルサレム教会に起きた問題は、ギリシア語を使うユダヤ人のやもめが、毎日の配給でなおざりにされていたという問題です。

エルサレム教会は、貧しい人などの生活に困窮している人たちの生活を支える「愛の業」を行っていました。教会の中で比較的裕福な人たちは、自分たちの土地や財産を売って献金し、それを使徒たちは、貧しい人たちの生活の必要のために分配していたのです。

使徒たちは、決して「伝道」だけをしていたわけではありません。彼らは「愛の業」も行っていたのです。彼らは、人々の霊的な必要のためだけに奉仕していたわけではありません。彼らは、人々の肉体的必要のためにも奉仕していたのです。エルサレム教会は、「伝道」だけでなく、「愛の業」も行なう教会であったのです。

しかし、エルサレム教会は、教会が急成長するに従って、「伝道」と「愛の業」のバランスが崩れていってしまったのです。これまで「伝道」も「愛の業」も、十二人の使徒たちが行っていました。しかし、教会に人が増えるにつれて、貧しい人などの生活に困窮している人たちも増えていったのです。そして、それらの人たちに対する「愛の業」の必要も増えていったのです。そのため、十二人の使徒たちだけでは、十分に奉仕できなくなり、結果的に「愛の業」も疎かになり、「伝道」も疎かになる危機に直面していたのです。

3. 祈りとみことばの奉仕に専念した

では、エルサレム教会は、この問題をどのように解決し、乗り越えていったのでしょうか。この場合、三つの選択肢があったように思います。一つは、「愛の業」を止めて、「伝道」だ

けを行なう。二つ目は、「伝道」を止めて、「愛の業」だけを行なう。三つ目は、働き人を増やして、「伝道」も「愛の業」も行なう。

エルサレム教会が選択したのは、三つ目の、働き人を増やして、「伝道」も「愛の業」も行なうという方法でした。2節以下には、このようにあります。「**そこで、十二人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。『私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します』**」。

エルサレム教会は決して、「愛の業」は教会にとってどうしても必要なものではないから止めようとか、「愛の業」は霊的な必要のための奉仕ではなく、肉体の必要のための奉仕だから止めようということにはなりません。彼らは、「愛の業」は教会にとって必要な働きであるので継続したい、継続するために何とか方法はないかと祈りつつ知恵を求めた結果、使徒たち以外の七人の働き人を選び、彼らに「愛の業」を行なってもらうことにしたのでした。

では、「愛の業」を行なう働き人は、肉体の必要のための奉仕だから誰でもいいのかというとそうではありません。「御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たち」でなければなりません。「愛の業」は、献げられた献金を管理し、それを貧しい人たちそれぞれの生活の必要に応じて、公平に分配しなければなりません。そのため「愛の業」を行なう働き人には、「知恵」が必要です。「知恵」というのは、単に頭が良いというわけではありません。聖書で言う「知恵」は、御言葉を生活に適用し、実際の問題にも適用できる人です。そして御言葉に基づいて問題を解決していくことができる人です。

「愛の業」を行なう働き人は、たとえ肉体の必要のための奉仕者であっても、信仰的・霊的な人でなければなりません。その意味で、「愛の業」も単なる肉体的な働きではなく、信仰的・霊的な働きであると言えます。

教会にとって「愛の業」は必要な働きです。しかし、それは「伝道」よりも、また「祈りとみことばの奉仕」よりも重要な働きかと言えば、そうではありません。教会にとって最も大切な働きは、「祈りとみことば」の奉仕であると言えます。使徒たちは、「伝道」か「愛の業」かを選択する時、自分たちは「伝道」に専念し、他の働き人たちに「愛の業」を委ねたのです。エルサレム教会は、「神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くない」ということを知っていたのです。「愛の業」は、教会にとって必要な働きです。しかし「神のことば」や「伝道」を後回しにしてまですることではありません。「祈りとみことば」または「伝道」は、教会にとって第一義的なものであり、「愛の業」は二義的なものであると言えます。

「教会」とは何でしょうか？教会にとって、どうしても欠かせないものは、「神のことば」です。御言葉の宣教を行なわなくなったら、教会が教会ではなくなります。御言葉の宣教をしないで、「愛の業」だけを行なっている教会を教会と呼べるのでしょうか？それは、教会で

はなく福祉団体です。「愛の業」は教会にとって必要な働きです。それは、「神のことば」に説得力を持たせるからです。教会がいくら「神はあなたを愛している」と言葉で語っても、教会が実際に隣人を愛する働きを行なっていなかったら、言葉だけ、頭だけの宗教となってしまいます。教会は、「愛の業」の実践があって初めて、「愛の福音」が説得力をもって人々に迫っていくのです。

エルサレム教会は、「神のことば」を最優先にしました。使徒たちは「祈りとみことば」に専念しました。しかし、「愛の業」も他の働き人によって継続しました。その結果、エルサレム教会はどうなったのでしょうか？7 節にはこうあります。**「こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った」。**

エルサレム教会は、「神のことば」を最優先にして、使徒たちが「祈りとみことば」に専念しました。そして、「愛の業」によって隣人を愛し、「神のことば」を愛の実践によって証ししていきました。つまりエルサレム教会は、「神のことば」と「神の愛」を言葉と行ないの両面で人々に証していったのです。その結果、エルサレム教会は、さらに成長する教会となっていったのです。

おわりに

私たちが今日覚えなければならないことは、教会にとって最優先にすべきことは、「神のことば」であるということです。「礼拝」と「伝道」、それは教会にとって最優先にすべきことです。そして「愛の業」も教会にとって欠かすことのできない働きです。しかしそれは、あくまでも二次的な働きです。「礼拝」と「伝道」を後回しにしてまで行なう働きではありません。しかし「愛の業」のない教会は、言葉だけ、頭だけの教会となってしまいます。「愛の業」は、「礼拝」と「伝道」に説得力を持たせます。また「愛の業」は、教会を実践的な教会としていきます。

このように、教会には多くの働きがあります。教会には大きく分けて、五つの働きがあると考えています。①礼拝、②伝道、③教育、④交わり、⑤愛の業、です。教会にとって、最優先にしなければならないのは、「神のことば」です。そして「神のことば」に仕えるために召されているのが「牧師」です。牧師が「祈りとみことば」に専念するために、多くの働き人が必要です。教会が成さなければならない多くの働きがあるからです。讃美の奉仕、祈りの奉仕、献金の奉仕、食事の奉仕、教会学校の奉仕、会計の奉仕、車の送迎の奉仕、子ども食堂の奉仕、チラシ配布の奉仕、チラシ作成の奉仕、ホームページの奉仕、看板の張替の奉仕など、沢山あります。

教会が「神のことば」を最優先にしていくためには、皆さんの奉仕が必要です。皆さんの賜物が必要です。皆さんの献金が必要です。皆さんの時間と労力を献げる献身が必要です。

教会全体が、自分の賜物を献げて献身し、奉仕をしていく時、「神のことば」がますます力強く人々に広まっていく教会となっていくのです。

天におられる私たちの父なる神様。

教会はなぜ存在するのでしょうか。この地上で神の国を豊かに証しするためではないでしょうか。そのために、信徒一人ひとりに賜物が与えられ、牧師や長老、執事などの教会役員が立てられます。この地域には、唯一の真の神であるあなたを知らない人が多くいます。どうかあなたの福音を、あなたの愛を、「伝道」と「愛の業」を通して、私たちが証ししていくことができますように。そのために、一人ひとりの賜物を豊かに用いてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。